



ゆたかな心をはぐくむ 人権のひろば

「家族」

武蔵ヶ丘中学校 2年

井上 慧寧

私は今の家族が好きです。このことは、今もこの先も変わりません。でもそんな家族が引きはなされてしまつことになったら……。

私は、人権学習で「満天星(マンティエンシン)」という中国残留日本人の家族について学習をしました。そこに出てくる中国残留日本人の井上鶴嗣さんは、実は私の曾祖父です。この「満天星」のことは、小学生の頃、曾祖父から何回か聞いたことがあります。その時は、「どうして日本人はこういうことをするのだろう」と思っていました。

曾祖父は幼い頃、戦争の為に家族と別れ、中国に残されてしまいました。大人になり、中国人の奥さんと結婚し、自分たちの子ども、そして奥さんの連れ子の子どもたちと共に日本で暮らし始めました。曾祖父が「日本に帰りたい」「家族と一緒に暮らしたい」と思うことは当然のことだと思っています。

しかし、日本政府は曾祖父と奥さんの連れ子の子どもたちには、血縁関係がないため、違法に入国したとして中国へ強制退去させようとした。ちゃんと手続きをして、日本政府も認めたのです。このことを知ったとき、私は腹立たしさを感じ

ました。

この時の家族を引き離されたらいい思い、愛しい家族への思いを込めて作られた歌が「カスミノウ」です。「越えられぬ壁をつくるのは何のため?」「越えられぬ壁を隔てるのは何のため?」私の好きな歌詞です。この中の「越えられぬ壁」はどう考えても一つの答えにはたどり着けませんでした。だからこそ魅力を感じて、好きになりました。この曲を作詞した東さんと妹の晴子さんは、私の父と叔母です。そして二人は、祖父の連れ子にあたる人の子どもです。血はつながっていませんが、曾祖父の孫です。二人はこの曲を作った時、どんな気持ちだったのか、そしてこの曲を歌った当時の曾祖父一家がどんな気持ちだったのか詳しく知りたいと思います。父に聞いてみました。

「越えられない壁」とは、強制退去させられようとした時に感じた「法律の壁」だと言っていました。中国では血が繋がっていませんが子だけれど、日本ではそうではないと初めて知りました。

その時、父達はとてもつらく苦しかったと思います。でもそんな中支えてくれた先生、友達にすごく感謝していると言っていました。また、この家族と出会えて、この家族として生まれてきて、本当に良かったとも言ってくれました。

父も曾祖父も、もう二度と家族と離れたくないと、それが一番の願いだと言っていました。

母にも話を聞きました。父と母は、この頃からつき合っていたそうです。しかし、この裁判のため、母は父と離れなければならぬと判りました。ずっと泣いていたそうです。だからこそ、私は私の家族にもつらい思いをさせたくありません。大切な人と離れる苦しみを味わわせたくありません。母は言いました。

「血が全てではない。」と。小さい頃の私は意味が分からなかったけど、今は分かります。あの裁判で母が感じたことでしょうか。

私は血で争わず、心で聞いていたんです。曾祖父一家は、心で精一杯闘ったから裁判に勝てたんだと思います。あの場で、血縁関係がどうのこうのと思う人はいなかったそうです。「家族」とは何なのか、「井上家」の願い、思いが多くの人に伝わったと当時を知る人たちが話してくれました。

私は父母や、曾祖父に日本は好きかと尋ねました。「大好きだ。」と言っていました。だから、今を思い切り楽しく過ごしてもらいたいです。昔のつらさを忘れてとは言わないけれど、そのくらい楽しんでほしいです。私たちのいる家族でいたいと思っしてほしいです。差別や偏見はなくそうと思っても、そう簡単になくせるものではないと思います。苦しんでいる人は今もいます。私の曾祖父達もそうです。もし私があの裁判の時にいたら、家族と離れてしまつたら……と考え

ると、とてもではないけど「日本が好き。」とは言えませんが。日本に来るんじゃないかと思えます。だから曾祖父や父母達はすごいなと思いました。

私は、「満天星」の学習を通して、改めて家族と向き合えました。曾祖父達が裁判で勝てたのは、家族がいたからだと思っています。

私にとつての家族は、「共に暮らす世界でたった一つのもの」です。いなくなつたらもう遅いです。ぶつかり合つて嫌になること、励まし合つて嬉しくなること、いろんなことがあります。人によって家族の捉え方は違つけど、私は、私の家族が大好きです。私の唯一の自慢です。貴方にとつて「家族」とは何ですか?

(これは、11月9日に行われた菊陽多文化共生学習会。共に歩み、で発表された「声」です。)



「きずな」(編：熊本県人権教育研究協議会)より

武蔵ヶ丘北小学校

学校だより

宝子の瞳を輝かせ!

武蔵ヶ丘北小学校(西崎 徹校長 児童数428人)は、学校教育目標「あいさつ 笑顔 思いやり すすんで学ぶ武北っ子」および「子どもたちの学力を高め自信を持たせたい」という校長の願いを受け、「分かった」「できた」という実感を持たせようと、全職員一丸となって取り組んでいます。現在、週に一度6校時を「基礎・基本の時間」と設定し、複数体制の個別指導を行っています。主に、国語科や算数科の基礎問題や発展問題、全国学力学習状況調査および県学力調査で課題があった問題に取り組んでいます。町の宝である子どもの瞳がますます輝くことを願い、取り組みの充実を図っていきます。



真剣に学習課題に取り組む子どもたち

菊陽句会報

きくよう文芸

うろこも母のしわとも鯛雲	田島 三間	蜘蛛の巣や七日数へて張り終へぬ	原野レイ子
秋舞台高校ダンス孫のみて	宮川ユキエ	秋深む父母なき故郷なほ遠し	寺尾千代子
やや寒の夕餉に優し根菜煮	紫藤 祥子	世の平和願ふバレード天高し	高橋 孝子
行く秋や阿蘇噴煙の衰へず	曾我 育代	早朝のウォーキング終へ息白し	福田 貴子
庭手入れ金木犀の香を纏ひ	曾我トモ子	オープンカー秋の車列のティアラかな	北川しんじ
文化の日世代交代体育祭	緒方チエ子	異人館残る街なる萬紅葉	佐藤 澄世
夕暮れの庭の明かりの石路の花	財津 早雪		

短歌会

お下がり足袋の小鉤が緩びては留めて遊びし遠き思ひ出	有久 賢治
初霜の備えに布を被せゆく残り少なき玉のレタスに	梅田 國雄
阿蘇の峰いつしか淡く紫の色とけあいて秋深みゆく	佐藤せい子
噴煙は雲なき空に立ち上り日の出を背にして赤み帯びたり	中村トシエ
光のなかを走って回わることもたち大きいケヤキはそれを見ている	松本 東亜